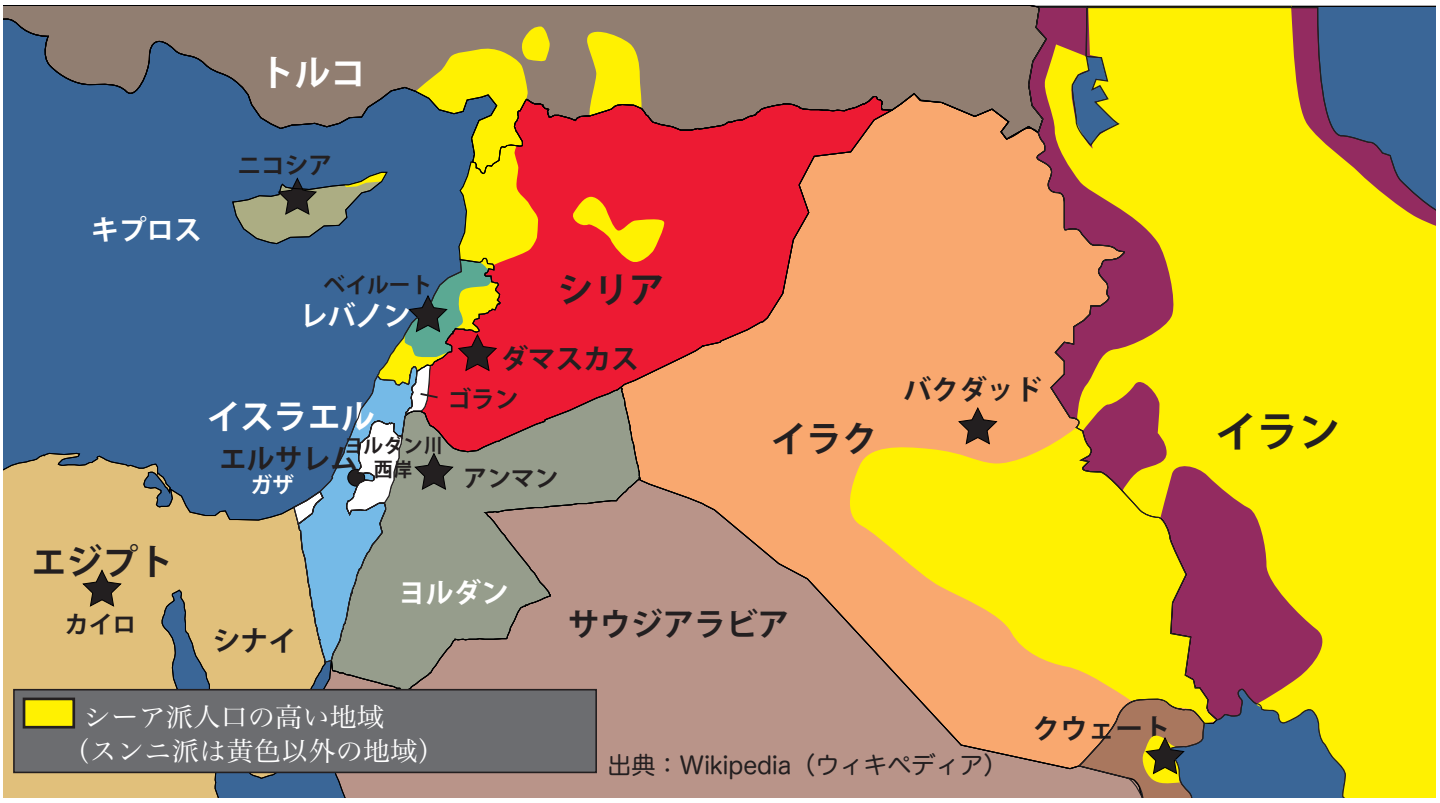


イラン：第四帝国

第2.2版

ハマス・ヒズボラ・シリア・イラン・イラクの反乱枢軸：「ばらばら」の取るに足らない小集団か、それとも「第四帝国」か

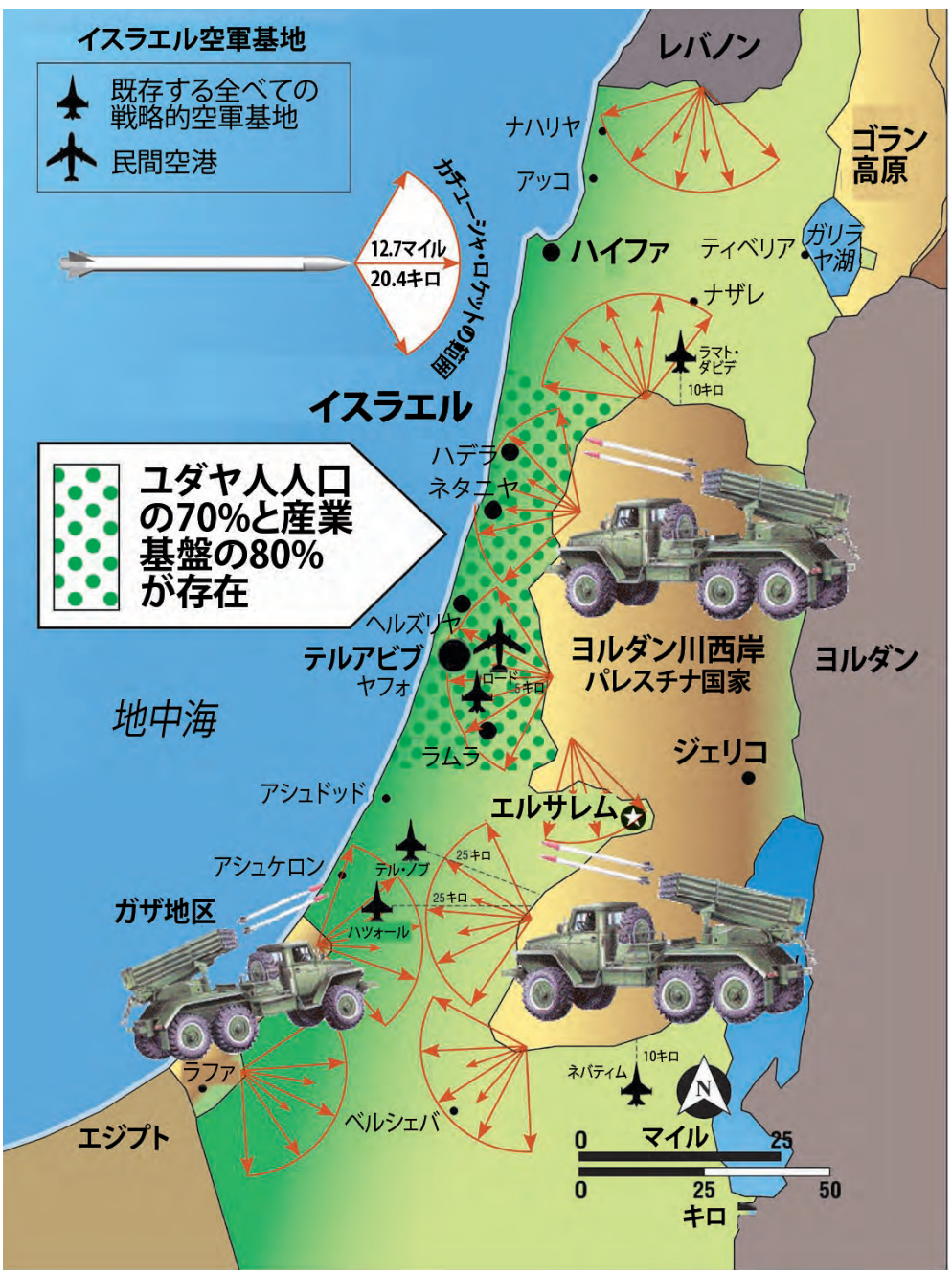
Mark Langfan（マーク・ラングファン）著

ハマス・ヒズボラ・シリア・イラン・イラクの反乱枢軸を、種々異なる離散した政治・テロリスト運動グループとして、ぼんやり見渡すのはなんとなく心地良い。単一の団結した軍事・政治的な集票組織としての陰湿な混合集団と見なすのは、思いも寄らない暗い現実を認めるようなものだ。つまり、その現実は、ユダヤ教・スンニ派・キリスト教・仏教・ヒンズー教の世界を壊滅・荒廃させようとする、増強中の核を保有する第四帝国が現存することである。そのような結論は、イラク、ハマス、ヒズボラの反乱組織を互いに分離し、両者に対するシリアとイランの重大な軍事的・国家的支持から遮断している、現存する見せかけの化粧板を剥がして現実を明らかにする。この恐ろしい現実は、ハマス、ヒズボラ、イスラエル戦争とイランが支援するイラク反乱軍の部隊が、アメリカと世界に対する増大し続けるイラン第四帝国枢軸を源とする現実の裏と表であるということだ。

したがって、唯一の問題は、そのようなイラン第四帝国が存在するかどうかということである。どんな種類の「専門家ら」も皆揃って「ノー！」と言う。彼らは「シリアはアラウィー派で、イランはシーア派」であるから、機能的な「枢軸」などは存在しないという虚報を偽善的に口にする。第一に、アラウィー派は、シーア派イマーム（指導者）である9世紀のハサン・アル・アスカリーにルーツを辿るシーア派の密教的一派である。シリアのこの少数派のアラウィー・シーア派が、実際はシリア国内の圧倒的多数のスンニ派を抑圧している。であるから、第四帝国枢軸は、純然たるシーア派の12イマーム派枢軸なのだ。さらに、歴史的に見ると、第二次世界大戦勃発前、ドイツとイタリアは、軍事的「枢軸」としての効果的な機能に全く同じ利害関係を持っている必要があっただろうか？いや、なかった。実際、今日の観点では、シリアは、新第四帝国枢軸の一層脆弱な要素で、イランはより強力な要素

である。「1930年代」に生じた忘れ難く不気味なまでに類似している点は、ムッソリーニが枢軸においてヒットラーのほぼ対等のパートナーとして見られていたが、現在アサド大統領がイランの対等のパートナーとして見られているという点である。当時の現実は現在の現実に類似しており、当時総統は一人だけであったが、現在は一人の「総統」が、イラン・アフマディネジャド大統領の他に、終末までに救世主マーディの再臨を信じるマーディスト達から構成される同大統領の陰謀団となっている。実際、イランは、ドイツが「1930年代」に事前に布石を打つべくイタリアを利用したのと同様、シリアを利用して、「40年代」のように、イランが覇権を握ることになるであろう。イランが不合理で無用なヒズボラ戦争の火付け役に回ったのは、イラン核問題を巧妙にカムフラージュするためではなく、ドイツがスペイン内戦中にイタリアを枢軸同盟に駆り立てたように、忌まわしい支配権獲得へとシリアを追いやり戦略的に後戻りできないようにしているのであろう。さらに、間もなく起こるイランの武装親衛隊（別名ヒズボラ）によるレバノンの支配は、ナチスのオーストリア併合（別名略奪）のシーア派式近代版に他ならない。

つまり、一見バラバラに見える新興第四帝国の複数要素は枢軸として互いに支援し合い、枢軸として互いに守り合い、統合された枢軸として一緒に戦っている。したがって、これらは枢軸と言える。単にイランがイスラエルに向けてイランの地から公然とミサイルを発射していないからと言って、物資、兵、技術的「アドバイザー」、宗教的「許可」を提供することが、ヒズボラによるイスラエルへの攻撃のために国家として本質的に支持していないとは言い切れない。同様に、米国兵士を公然と殺すために、実際のイラン軍服を着た本当のイラン兵士を、イランがイラクに送り込んでいないからと言って、イランが国家としてイラク反乱運動に多数の死者を出すIED（即席爆発装置）で後方支援したり、資金・要員を供給したりすることによって、何百人もの米国兵士を殺傷し、イラク国内での重要な転換点の不安定化に影響していないとは言えない。イラクの米国駐留軍に対するイランが仕掛けた極めて破壊的な無言の戦争は、米軍の壊滅的敗北をイラクで引き起こすことを明確に狙っている。ガザ、レバノン、イラク内の活動領域におけるイランの邪悪な原始的な運動は成り行きの単独の干渉ではなく、特に米軍破壊を目的とし、さらにはペルシャ湾と世界に対し重大な戦略的関心を抱いた、意図的、組織的、かつ集中的な戦争である。



戦争の合間に生じた重要な問題として、サダムのケバケバしい敵意に満ちた威嚇が挙げられるが、これは、悪質なイスラム・ナチス的なイランが静かに画策していた、より現実的で、はるかに重大な同様の危険性を覆い隠したに過ぎない。イランはこの危険性を、現金送金を対価として獲得したロシアの核技術によって培っていた。ロシアは、1940年にも同じように、フランスと英国に対抗するためヒットラーの初期における電撃戦の機械に必要なオイルを売った。偶然にも、恐れをなしたサダムが破滅したため、核開発の初期段階にあったイランが事実上

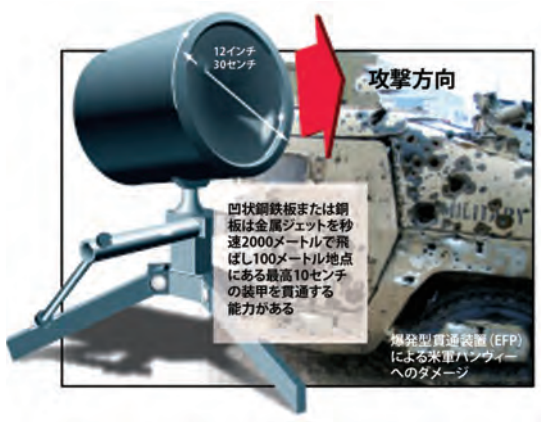
阻止不能の核武装したイラン第四帝国になるべく、資金不足状態にある今ならば阻止可能なイランが世界にこの明白な邪心を確認・認識させるようその醜い頭部をもたげたのである。さらに、サダムの破滅により、何十年にも及ぶイランの核兵器取得に向けた軌道は実質的に一切変化しなかった。たとえば、ブシェール核施設は1995年にロシアと契約を結んだ。実際、逆に、サダムの脅威がないため、イランは、「脅威」にさらされると、核兵器備蓄の野望と意図を公然と繰り返し述べてきている。

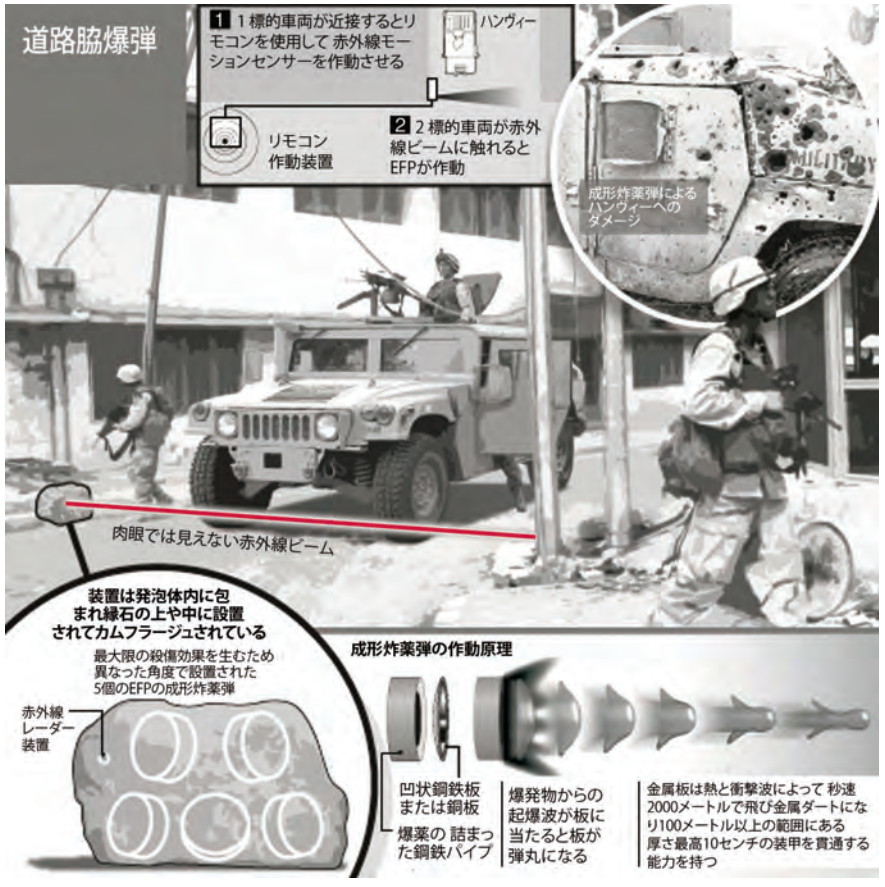
とは言え、シーア派の第四帝国が実存するならば、直ちにその影響は過酷で劇的で悲惨なものとなる。最も重要なことに、ファシスト体制のイタリアの近代的再来とも言えるシリアは、直ちに事実上アメリカの敵国となる。シリアはイラク反乱軍とヒズボラ反乱軍の両者の活動を有効にするための重大な供給源であるが、この知られたくない秘密に米国はもはや目をつぶることができない。実際、シリアは、ハマス、ヒズボラ、イラクの反乱を支持する主要供給源であり、また主権領土の安全な避難所でもある。シリアは米国とイスラエル両国に反する意図的で能動的な戦闘相手であり、単なる受動的な「無関係な傍観者」ではない。

実際、ハマス、ヒズボラ、イラクの反乱に対し、米国とイスラエルはそれぞれ別々にシリアを「無関係な傍観者」として取り扱っているが、これはハマス・ヒズボラとの消耗戦でイスラエルが敗北することと、イラクでの対反乱作戦で米国が敗北することを確実にする。アサド・ジュニア（シリア大統領）は、両前線の公然とした支援を、自らの政権にとって「費用がかからない」だけでなく、自らの正当性を高めるものとして見ている。アサド大統領は、その結果、ムッソリーニと同様、武器の再補給活動を強化し両方の対立をさらに煽ることに誤って勇気づけられる。現実は、米国は、レーガン大統領からブッシュ大統領がカダフィに求めたのと同じ「エルドラド・キャニオン作戦」みたいな愛のむちをアサド大統領に打つ必要がある。脆弱なイランの共犯者を包囲し、シリアから反乱軍への主要な供給ラインを断つのに必要なのは、ただそれだけかもしれない。そうでなければ、シリアに対し米国とイスラエルが悲惨なほど全く行動を起こさないため、アサド・ジュニアが自分のことを、真の姿であるイランの手先ではなく、最高権力者であったアサド・シニアであると勘違いさせることになる。同時に、イラクのスンニ派人口は、生き残りをかけて、シリアから取り込んだアルケイダ反乱派を撲滅し、実際、米軍を保護するという利害関係を持っている。米軍が撤退した場合、イラクのスンニ派はシリアとイランの両枢軸から消滅させされるからである。

米国が第四帝国の現実に対し即座に軍事的・政治的対応を講じなかったことは、米国が1930年代に第三帝国枢軸の急激な強化を無視したこと以上に、世界平和と世界保障において、取り返しのつかないほどはるかに壊滅的なものとなるであろう。1930年代、広大な防衛力を提供する海があり、ドイツは核保有の可能性も、石油の

イラン製即席爆発装置：IED（Improvised Explosive Device）





IED
（写真上）
出典：The Sunday Telegraph（英日曜紙サンデー・テレグラフ）、
Toby Harnden（トビー・ハーンデン）記者、
2006年8月20日付け

現場
（写真右）
出典：The Sunday Telegraph（英日曜紙サンデー・テレグラフ）、
Toby Harnden（トビー・ハーンデン）記者、
2006年4月30日付け

© The Sunday Telegraph 2006

大量アクセスや管理すら有していなかった。今日、全く正反対のことが当てはまる。イランは核保有の可能性を増大させ、イラン第四帝国は広大な天然石油脈に位置している。さらに、イランはよろめきながらうずくまっているスンニ派による形ばかりの王国に乗っかっているが、今日の世界経済に必要な膨大な戦略的天然資源がある。周囲の地域は世界石油埋蔵量の3分の2を有し、したがってこの地は「ベトナム」と同じではない。そのため、イランは、中国とロシアのような超大国に対し計り知れない経済的影響を持ち、与えている。最後に、MADはイランに対する戦争抑止力としてではなく、刺激になるという悲しい事実を、この不安定な融合体に加えなければならない。つまり、これは美しい光景ではない。

今日、イランは、イスラエルの存在を米国軍事力の事実上の投射として、また将来における中東と世界の支配に唯一残された障害として正しく認識している。これはヒットラーがヨーロッパ支配の唯一の障害として英国を見ていたのと同じである。イランは、第二次世界大戦中ドイツの犯した失敗と、「1990年代」のサダムの犯した失敗から教訓を学んだ。ドイツは第二次世界大戦中の英国の前進基地を破壊しようとする前に敗北したフランスを占拠して時間や労力を浪費したが、イランは、英国で失敗したドイツとは違い、米国の息のかかったイスラエルの基地を破壊しようとする前に、破綻した中東の統合に向けて時間や労力を浪費していない。実際、複数のスンニ派石油王国が表面的に小国乱立状態になっているのは、蓄えてきた真のイランの強さを覆い隠す、戦略的な見せかけの分裂である。イランが最終的にイスラエルを破壊したら、米国にはイランに対する世界戦争は勝算があるが、それが始まる前に、米国の軍事力を損なおうとするであろう。その結果、イランは中東の主導権完全獲得に対する唯一残された障害である両国から自らを解放するために、イランが武器調達する、イスラエル軍と米軍への対抗代理軍による執拗な消耗戦を強いられることを、米国は予期できる。または、代わりとして、米国・イラクの壊滅的な敗北・撤退をきっかけに、イランはイラク南部からヨルダンまでの範囲を確実に軍事占拠するであろう。そして、イランは、サウジアラビア、カタールの米中央軍、バーレーンの米第5艦隊司令部の頭上にダモクレスの剣を吊るす。

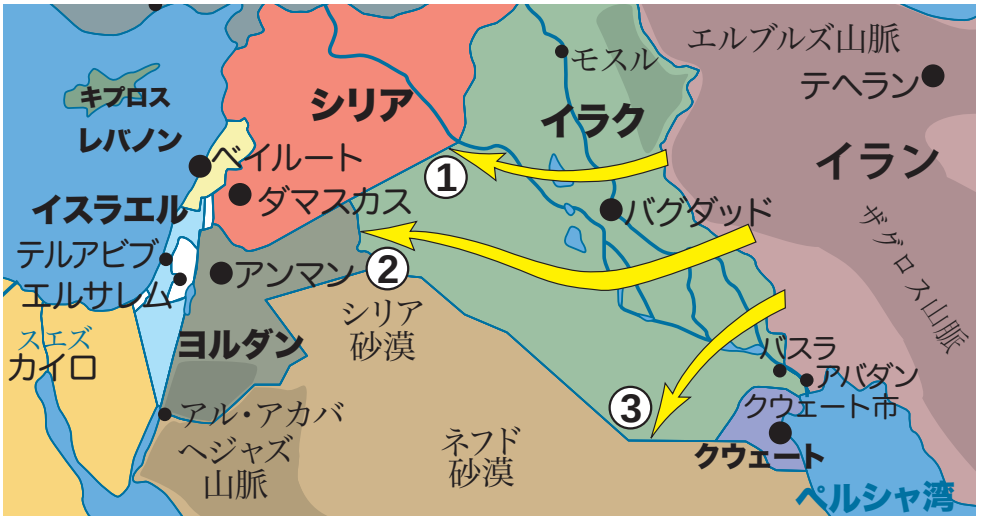
今、米国が戦いを挑み、対策を講じ、第四帝国の可能性に対し自国と同盟諸国を守らない限り、「1930年代」が速やかに「1940年代」になり、イランが勝利する「1950年代」の状態になる恐れがある。

Mark Langfan（マーク・ラングファン）はイスラエルの軍事問題について多数の記事を出版。この記事（第1.0版）は2007年1月に『Jewish Voice and Opinion』（ユダヤの声と意見）に投稿出版された

米国・イラクの敗北・撤退
イラン勢力拡大の悪夢のシナリオ

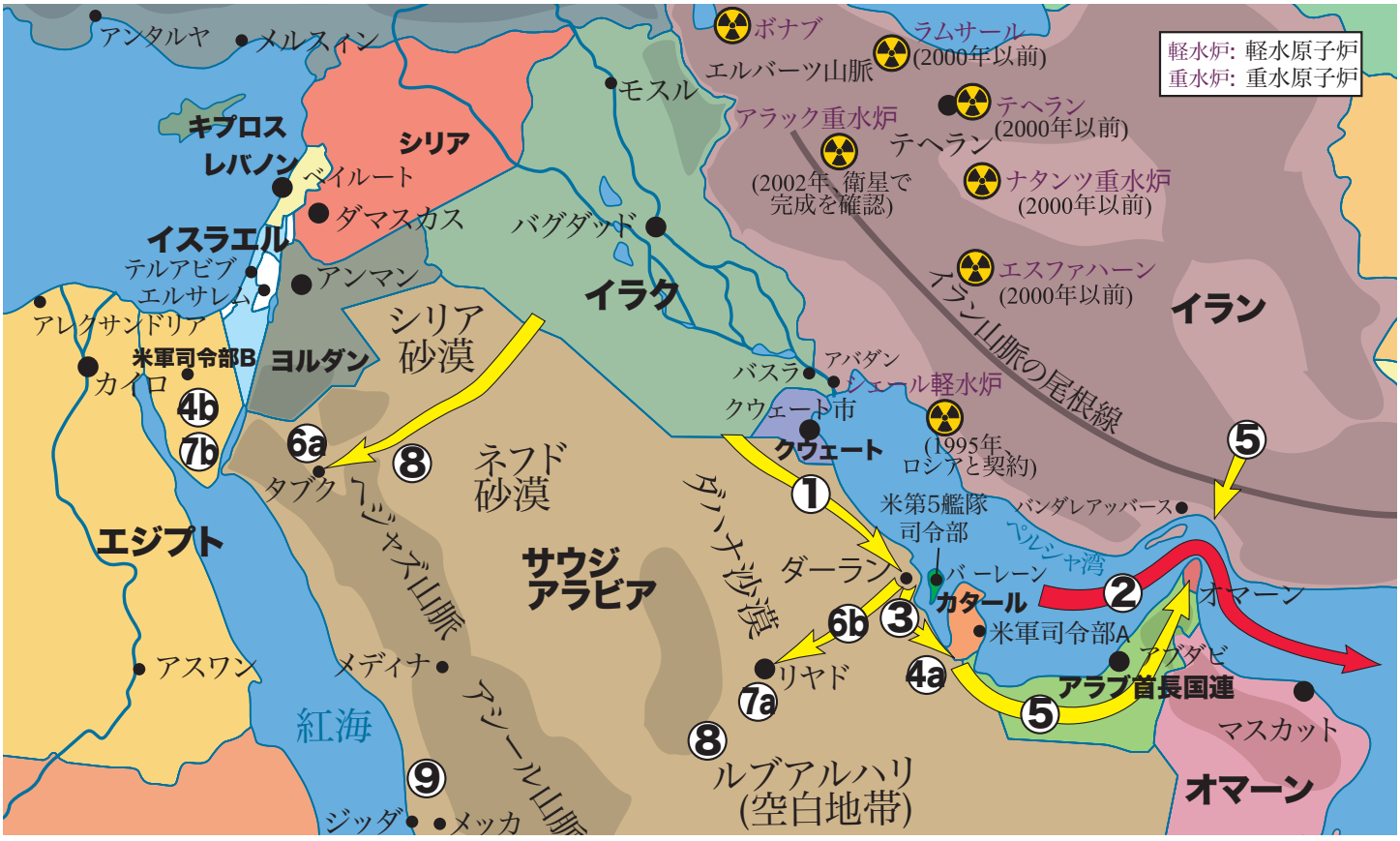
第一局面：クレセント・オブ・ダモクレス

イラクの完全敗退を引き起こす、イラクでの米軍の壊滅的な失策をきっかけに、イランは、イラク南部を横断し、1) シリア国境、2) ヨルダン国境、3) サウジアラビア国境へと革命防衛隊の「ソフトに」重武装したアルクッズ部隊を大量動員するであろう。統合したら、次に、イラン人はスンニ派残党を圧倒し浄化するために「ハードな」重武装した小型乗用車を動員する。



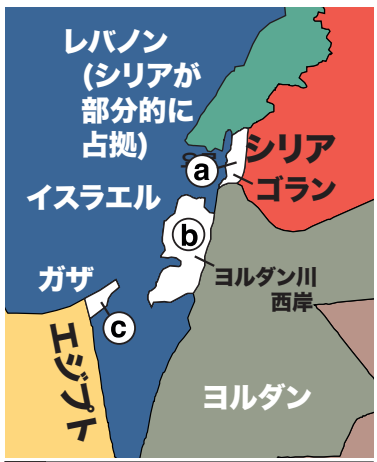
第二局面：マハディーのシャムシール剣

1) ダーランからの米陸上部隊の反撃を封じ込み、バーレーンの米第5艦隊司令部の占領を脅かすために、イランの軽装甲部隊や落下傘部隊がイラクからダーランに弧を描くように南東部に電撃戦を加える。
2) カタールの米軍司令部A（2a）は、米第5艦隊司令部、米軍司令部A自体を守り、米第5艦隊と残りの空母戦闘群をペルシャ湾から緊急戦脱出させるために事実上全ての航空資源を迂回させる。さらにイスラエル空軍には、イラン軍（2b）の進攻を遅らせるために大規模の援護射撃を行う必要が生じる。
3) イランは攻撃を強化し、米軍司令部Aを脅かしながら南東部からペルシャ湾岸へと進攻し続ける。
4) イスラエル航空管制の安全運行範囲内において、米軍司令部Aは（4a）から退去しイスラエルが退去した旧シナイ半島空軍基地の米／NATO軍司令部B（4b）に後退する。この空軍基地は、イランからの攻撃があった場合、効果的な撤退・反撃地点となるよう、サウジアラビアの多大な費用と、米／NATO軍単独の運用管理の下で直ちに改装・修理の必要がある。さらに、イランからのサウジアラビア半島への攻撃に対して米／NATO軍司令部Bの「出動」となった場合に、トルコの防衛義務も含め、全NATOによる相互防衛義務を起動することにNATOは同意しなければならない。
5) イランは西部からリヤド（5a）に進攻する。それと同時もしくはその代わりに、ペルシャ湾を封鎖し米軍艦を包囲できるホルムズ海峡の後半を支配すべく、アラブ首長国連邦（5b）を通ってペルシャ湾沿岸を抜け、戦略的目標であるオマーンに達する。
6) イランが、イラク、シリア砂漠からタブーク（6a）までの南西進路またはダーランからリヤド（6b）への西部進路で攻撃する場合、イランの目標は、メディナとメッカの聖地を攻略することである。そうなればイスラエル空軍はこれらの武力に対して大規模な抗戦を仕掛け、米／NATO軍司令部Bによる反撃の再編成のために米軍が戦術を練る時間と余裕を持つ必要がある。
7) サウジアラビア空軍は直ちに米／NATO軍司令部Bに逃れ、これらの貴重なサウジ軍事資産をイランへの反撃に向けて、米軍の指揮・管理に効果的に活用・統合できるようにしなければならない。
8) イランによるシリア砂漠への進軍やリヤド間の西方進路がそれ以上に進んだ場合、統一され一丸となった指揮下に入ってその影響を及ぼすため、イスラエル空軍を含む周囲の空軍と共に、完全に起動され戦闘に即応可能な米／NATO軍司令部B軍によってイランの進攻を無力化できる。
9) サウジアラビア半島の南西四半部を米軍が完全に統制し支配権を握った場合においてのみ、サウジアラビアの地上域を安定化するために、ジッダで地上軍を投入できる。
最後に、イラン山脈の尾根線は、自然の地形による防空となり、イラン内核は比較的空襲を受けにくくしている。イランに対する攻撃計画は、米国の南北戦争で講じられたアナコンダ作戦のような周辺的な長期間にわたる封じ込め計画を含める必要がある。



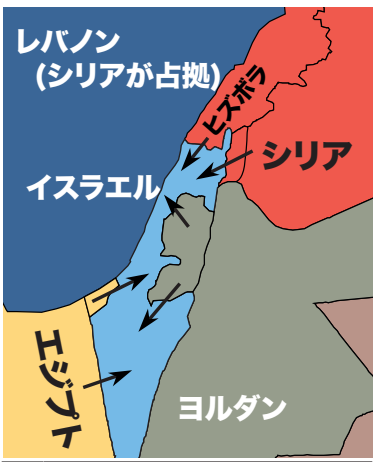
イスラエルの戦略的価値

9・11事件後のテロ戦争のシナリオ



1 事件前

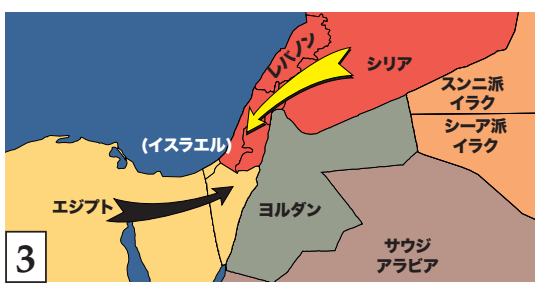
ヨルダン川西岸やガザ州が非武装化されると、米国の戦略的資産と中東テロに対する防壁となっている自衛可能なイスラエルを、自衛どころか米国の武力を見込むことすらできない無防備な、米国にとって不利益な国に化し、攻撃を招くことになる。



2 事件後

1. 米国にとって戦略的な自衛可能な資産としてのイスラエル：イスラエル軍支配下にあるゴラン高原（a）、ヨルダン川西岸の山岳地域（b）、ガザ地区（c）によって、イスラエルは短期から中期において実存する脅威の心配がない。.

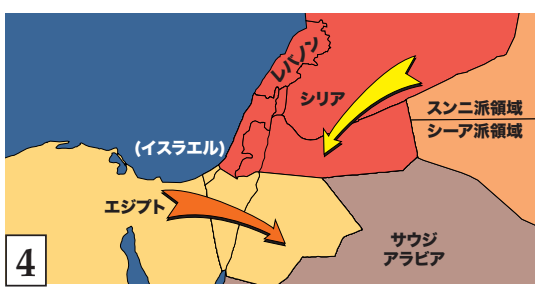
2. 攻撃を招くことになる無防備な、米国にとって不利益な国としてのイスラエル：イスラエルがゴラン高原、ヨルダン川西岸の山岳地帯、ガザ地区がイスラエルの支配下ではなく、アラブの敵国の支配下にあった場合、イスラエルは戦略的に脆弱であり、短期的な実存する脅威にさらされる。そのような紛争はイスラエルに対するアラブによる継続的なテロによって煽られる。



3

3. イスラエル：一次連鎖

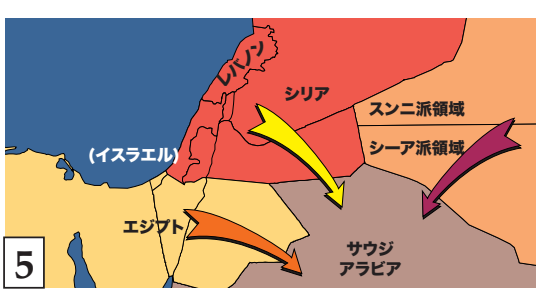
ゴラン高原やヨルダン川西岸の山岳地帯による自然の防壁を失い、イスラエルの軍隊動員能力が弱体化した状態になった場合、イスラエルは簡単にシリアとエジプトに破壊され占拠されるであろう。高度に軍国化されたパレスチナ国家でさえも、シリアかエジプトのいずれか一方を軍事的に封じ込められない。ヒズボラ、シリア、エジプトはいずれも待望のエルサレム占拠のために競い合うことになる。



4

4. ヨルダン：二次連鎖

イスラエルが戦略的防御国でなくなると、ヨルダンは強力な軍隊を有するヒズボラ、シリア、エジプト、イランシーア派勢力によって簡単に侵害されるであろう。シリアは現在ヨルダンをシリア南部と見なしており、「自明の運命」という自ら構想を実現する。



5

5. サウジアラビア：三次連鎖

強力な軍隊はあるが石油資源に乏しいエジプト、シリア、サウジアラビア北部国境のイランシーア派勢力に囲まれたサウジアラビアは、消滅することになるであろう。スエズ運河が味方国の占領管理下にない場合、西側主要諸国はサウジアラビアに武器を再補給したり守ることはできない。

Print

Islamic Republic

Iranian Supreme Leader Khamenei
Photo: Reuters

click here to enlarge text

click here to reduce text

『「穏健派」であり、かつ「過激派」である指導者か？』

『このような「穏健派」を伴い、「過激派」を必要とするキリギリスか？』

MLによるNota Bene（ノータ・ベネ）

ハーメネイー師：イスラム教世界を分化するイスラエル

イラン最高指導者はムシャラフ・パキスタン大統領に「シオニスト政権はイスラム世界を分化するために西側によって造られた」と語った。続けて、地域紛争は「米国の攻撃性とシオニストによる犯罪の時代が済めば」終結すると述べた。

Dudi Cohen（デュディ・コーヘン）

月曜日、イラン最高指導者アヤトッラー・セイイェド・アリー・ハーメネイー師は、訪問中のペルヴェズ・ムシャラフ・パキスタン大統領将軍との会談で「シオニスト政権の確立はイスラム世界での継続的な紛争を生むために西側によってなされた行為だ」と述べた。

最近テヘランに到着したムシャラフ・パキスタン大統領は、パレスチナ人に対して犯罪を続けることを奨励するものとして、米国と英国がイスラエルを支援しているとの説明をハーメネイー師から聞いた。

「中東に関係する計画は、米国の攻撃性に終止符を打ち、シオニストによる犯罪を阻止する時代が来るまでは、成功しない」とハーメネイー師は述べた。

アフマディネジャド大統領（左）、ムシャラフ大統領とハーメネイー師、月曜日テヘランにて（写真提供：AFP通信）)

ハーメネイー師はまた、パレスチナ問題についても着目し、ハマス政府が『「シオニスト」に対して立ち上がることがパレスチナ問題への道を示すのに役立っている』間、レバノン戦争中にイスラエルの脆弱性が明らかになったと語った。

ナタンツ核施設内の328基の遠心分離機

一方、月曜日、欧州の外交官らは、イランが地下核施設内にそれぞれ164基の遠心分離機を連結した2列のカスケードを設置し、本格的なウラン濃縮の基礎を築き、西側に対する長距離攻撃の危険性を増したと、報告した。

これらのカスケードは内部のウラン原料なしに近々試運転されることになっているが、テストに成功した場合、核燃料物質を加えるとのこと。328基の遠心分離機は、今後数カ月のうちに3,000基の予定設置の先駆けとなる。

イランは最近、巨大な地下総合施設に、いわゆる「工業規模」の濃縮開始に必要な配管、電気ケーブル、その他の機器の設置を済ませており、この施設は中央イラン砂漠の高射機関砲によって要塞のごとく取り囲まれている。

ynet news.com | newsחדשות

Print

Strategic Threat

President Ahmadinejad Photo: AP

click here to enlarge text

click here to reduce text

イラン：イスラエルと米国は間もなく破滅する

アフマディネジャド大統領：米国とイスラエルは間もなく滅亡することを断言

Yaakov Lappin（ヤアコブ・ラッピン）

イラン・イスラム共和国放送（the Islamic Republic of Iran Broadcasting：IRIB）のウェブサイトの報道によると、火曜日のシリア外務大臣との会談中、マフムード・アフマディネジャド・イラン大統領はイスラエルと米国は間もなく破滅すると述べた。イラン国営ファルス（FARS）通信もこのコメントを報告した。

「マフムード・アフマディネジャド・イラン大統領は… 米国とシオニスト政権のイスラエルが間もなく破滅することを断言した」とのイラン大統領のコメントを伝えた。

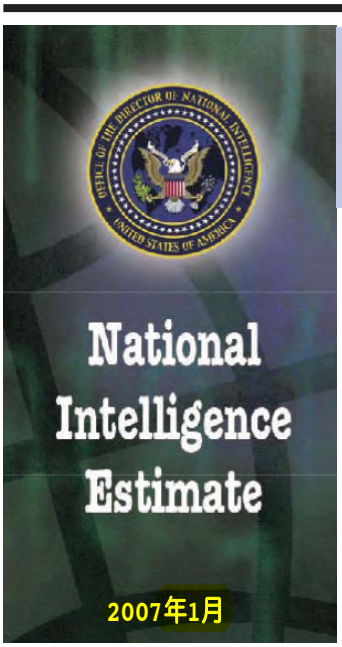
報道によると、「イスラム教徒内、特にシーア派とスンニ派の間の不調和に拍車を掛けているのは、地域諸国を支配し、それらの資源を略奪するためにシオニストと米国によって企てられた陰謀である」とアフマディネジャド大統領は付け加えた。

イラン大統領はまた、レバノンでの出来事をイスラエルの破壊を目的にしたより広い範囲の計画に直接結び付けた。同大統領は、「地域諸国」に「シオニスト政権の崩壊はもちろん差し迫っているが、その政権の弱体化の基礎を築くために、レバノン人のイスラム抵抗運動を支援し、種々のパレスチナグループの中で団結と調和の強化に努力する」よう説いた。

アフマディネジャド大統領は、ここ数カ月のうちに幾度となくイスラエルを全滅させると脅迫し、最近では破壊対象国リストに米国と英国を加えたと述べた。

ワリード・ムアレム・シリア外務大臣は、米国が「イスラム教徒の大虐殺」の実行を計画し、地域のイスラム教徒内に不調和」の種を蒔いていると批判した。

IRIBのウェブサイトによると、ムアレム外務大臣は、「平和と静寂を確立するための土台を築きつつ….今後イスラム教徒の大虐殺を阻止するよう地域諸国」に訴えた。



イラク安定性に関する見通し：先行き困難

イラク近隣諸国の影響、これらはイラク内の出来事によって影響されるが、これらの外部者の関与は、イラク国内の党派の力関係が自立的な性格を持っているため、暴力の主要推進要因または安定の可能性をもたらしそうにない。とは言っても、イラクシーア派武装組織の特定グループの致死的な活動をイランが支援することによってイラク国内での紛争を明らかに激化している。シリアは今もなお、祖国を捨てたイラクバアス党員の安全な避難所を提供し、イラクへの外国人ジハーディスト（聖戦主義者）の入国を停止するための適切な措置をあまり講じていない。

そのような急速な撤退が起こった場合、ISF（イラク治安部隊）が無宗派の国立機関として生存する可能性は少ないと、我々は判断する。イラク党派に招かれたまたは強制された、近隣諸国は紛争に公然と介入する可能性がある。